

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成15年  
2月号

毎月23日発行  
通巻390号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成15年2月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)44-0015  
★印刷 大倭印刷  
★定価 1部 250円  
年間購読料3,000円(送料共)  
★振替口座 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



法主様と生母さん、昭和44年11月20日身延山で一泊の折 神戸市 佐藤孝子さん撮影

「一大事の因縁」の余談として

## 生母さんの霊能力について (上)

法主様のお話より

『すさのお』紙に、昭和48年3月号(第78号)〜49年10月号(第97号)にわたって法主様が「一大事の因縁——血縁と地縁の神秘」『ながそねの息吹』所収』という題で、ご自身の家の因縁について書かれています。連載が終わった時、編集部が法主様を困ってお話を聞き、98・99号の記事にまとめました。(ついでに書けばそれを節目に第100号から紙名が現在の『おおやまと』になりました) その折に、記事にはならなかった生母さん(矢追日妙師、法主様のお母さん)の霊能力のお話の部分を、二月十七日の生母さんのご命日にちなみ今回まとめました。(編集部)

### 想念で作ったものも出る

杉本順一「一大事の因縁」に出てくる遠山国子という法華行者さんの話には、非常に仏教的な霊界が出てきますやろ。ふだん僕は法主さんの霊界の話で具体的な像は聞いたことないけど、仏教とか神道とかいう臭いはあまりありませんわね。ただ姿が見えない人間としての感覚というのが強い。ところが、ここに出てきはる人の霊界の話を見ると、仏教絵画を見ているような感じですよね。仏教というのはアジアのもので、アフリカとかアメリカにはあまり縁がないだろうと思います。しかし霊能というのが人間が持っている一種の能力であるなら、仏教的にだけ出てくるというのはどうなんでしょう

う。仏教を分ける人には非常に分かりやすいやろけど。

例えばもし原始的な、我々が頭で区別して宗教と言うような宗教でなしに、もっと犬や猫みたいな、ごく自然の感覚としてあるのだったら、また全然違うわけでしょう。その辺は、法主さん、どういうことでしょう。

法主 これは、分かるように説明しようと思つたらちよつと難しいんやけどな。

一つの実相として霊界の姿形が見えることは、私も見える場合があるんやから、生母さんも見えたんやと思う。生母さんが大倭神宮におつた時分には、神さん、というよりも日本の先祖さんやな、例えば奇稲田日女命やとか須佐之緒命、明治天皇でもええわ、当時の服装してね、そんなのが実に多く出てきて、しよつちゆう交流があつたんやね。

けれど、遠山さんと関係ができてから、ちようど(弟の)隆義ができた頃ぐらいいから、母親は仏界が見えだしたと言っていたわ。そうすると、いろいろな仏画で見えるような姿のものが出てくるわけやね。私の場合でもある程度、そんな感応はあるんやけど、自分にとらわれないし案外すかっとしていれるもんやから、頻繁には出てこんわ。必要のないものは出てこんというの、自分自身の氣持に要求がないからやと思うのやな。

私は今日までの長年の経験を通して言うんやけどね、霊界というのは、現実にも形としてないものでも見える場合あるんやで。例えば大本宮のことで、鏡池があつて、その下に今耕作している畑があるやろ。私が今、ここは世界の人が寄つてくるし世界の平和会議でもしたらいいと思つて、自分の空想で畑の中心の所へでつかい膨大な殿堂を建てるといふことを意識するわけやね。それで具体

的にその形を絵の上でも出したと仮定するのや。しかしそれが実現はしないままで、死んだとするねん。それでもね、仮に百年とか五百年、千年の将来、過去の霊界の姿を見るような能力者、生母さんみたいな人が生まれたとして、その人が大倭へ来た時に、昔、矢追日聖という人がおつた頃に、この池の下にはこういうような姿の立派な殿堂があつたというように感応して指摘するはずやねん。霊界つてそんなもんやねん。

コンクリートでも木造でも人間の手を加えて形を作つたものは、現実の現界の中の一つの造形物としてできたら、それはそれとしての相があるねん。仮にそれが火事がいくとか地震か何かでなくなつたとしても、その姿は永久に残るわけや。ところが、そういうような資材とか物質を使わないで、自分の念の世界で作つたものがあるとするやろ。その場合でも、現実にそこに実現したものがないとなつた時と同じ形になるんや。後の人が見れば、ここにできとるわけや、一回も作らないものであつたとしても。

そうすれば、仮に私が仏教なら仏教の経典、例えば観音経を読んで、観音さんにこういうような働きがあるということを説いたとするやろ。それを今度は芸術家が一つの像として表す場合に、背中からエビガニみたいにくさん手の出ている観音さんの像を作つてみたり、また不動明王というのは目二つの真ん中にもう一つ目を描きよるわな。それは一つの哲学的な理屈、理でもって作り上げた空想やけれども、その理を具象化して、絵に描く、また像に作るわけやね。そんなものは霊界にも現界にもあり得ないものであつたとしても、そのままの姿で霊界に実在しとるのや。それが動くし、ものも言いよる。だから鬼みたいなものも出てくるし、鬼子母神が出てきてものを教え

たり、あり得ることやねん。

そういうような根本的なことが分からなかつたら、ちよつと話がやりにくいんやけれども。

それで、うちの母親は子供の時からずつと神通力いわゆる霊視する能力のあつた人やけれども、うちへ嫁に来た頃には、さつき言うたようにうちの中における昔の固有の霊が出てきて、いろんなことを言うてるんやね。それが仏教の世界に入つていくにつれて、理の仏がたくさん——過去の人たちが、インドからこつちへ伝わるまでいろいろ作つてるわな——現実にはないものでも、霊界に一つの相として残つてるから、見る人が見たら出てくるわけや。だから生母さんでも、こんな観音さんが今日出てきたとか、六道の辻があるとか、ここは地獄、ここは極楽、ここは修羅道とかね。

十王経という経典にそれを説いているんやね。十王経はお釈迦さんとは無縁のもんや、中国で作られてんけどな。人間の心のあり方によつて死後の世界は、地獄界から仏界まで十界があると説明してのや。その説明する坊さんの心の中には、やつぱり空想的な地獄、餓鬼、畜生、修羅というのがみんなあるわけやねん。誰かが言いだすと霊界で実在してくるのや。

人が死んだら、最初の初七日にはこの王さん、二番目の七日には次の王さん、三番目の七日にはまた次の王さんのところへ行く。十人の王さんがいて裁判を受けて、どこへ行くか決まるわけや。

母親が信者に、地獄へ行く人もぎょうさんあるとかいふ話をするから、私は笑いながらね、「霊界というところには南方の色の黒い人も支那人もインド人もみんな来てるか」と聞いたたら、「いいや、来てへん」と言うねん。「日本人ばかりか」といふと、「そや」と言うのやな。母親は正直やから。けれども霊界というのは日本だけのもの

とは違うやろと思うねん。もしも地獄極楽が霊界に実在するのやつたら、インド、中国や日本だけやなしに、仏教は信じてても信じなくても、世界中の人が行くんじゃないかと。「死んだら十王さんのところへ行くのやつたら、一日に世界中の人間が何万人死ぬと思っってはねん。それだけの人が毎日十王さんのところへ、ずらーっと並んで皆裁判を受けとるやろか」と理屈をこねて、ひねってやるんやな(笑)。「そない言うたかて、そんなものあらへん。お前、おかしなこと言わんとさ」と、うちの母親は言うたけどな。「それだつたら、地獄極楽と言うてるけど、日本人に通用するだけやねん。アメリカ人が来たら、どないなるねん」と言うてみたり、よう冷やかしたわ。

結局、想念の世界で作っただけの範囲やねん。信じている世界だけや。

「一大事の因縁」に仏教的なものがよく出てくるけど、これはこれとして生母さんにはそのま見えてるのや。鬼子母神も出てくるのやな。それからまた神さんも出てくるわけや。いろんなのが出てくるねん。それには今言うように、現実にあつた歴史的な人物と、想念の世界で作った人物と両方あんなねん。それが同時に出てくるの。そうすると区別つかへんのや、霊界を見ていたら。そこがもう難儀なことやねん。

## 見えたら見えた通り

けど生母さんは学問してへんやろ。だから見えるだけのことしか分からへんの。お経は読んでへん。

(四天王寺の塔ができた謂れの話) お経を読むでへん代わりに、初めの頃やつたけど修行に出る時の心構えとかを、霊界から教えてもらつたん。

やな。これ、鶏嶽さん(※鶏嶽大加美。またの名、御嶽坊大僧正・鞍馬大魔王)が教えるんや。その例をあげるのに、私が聞いたのでは、大阪の四天王寺の塔ができる謂れを教えてもらたと言うねん。忘れてしまうたけど、大阪の町で二人の屑拾いがいて、貧乏なんやけど、仏さんに供養したい、塔を建てたいという念願をするんやな。片一方の人が死んで夢枕で、私は今度こそこの蛇に生まれる、その蛇をつかまえて殺してくれと、自分の連れに頼むわけや。蛇の次は確か犬に生まれたと言ったかな。それをまた殺してもらつて、最後に京都の西陣の織屋のボンボンに生まれて、それで金を出して、あの塔を建てたという話やねん。塔を建てるまでに、三度生を変えて生まれ変わったんやな。そういう物語を鶏嶽さんから生母さんが教えてもろてん。

それから後で、私が四天王寺へ行つてん。そうしたら、その屑屋の話はほんまやねん。それで今でも屑屋の供養してると、四天王寺で言うてたわ。生母さん自身はそんな話、気振りも知らんのやで。そやから、霊界人というのは、現実にあつたこともまた物語をしてくれるんやなと思つたりな、そんな記憶もあんなねん。

(地獄の鬼の話) そうかと思うと、地獄極楽のような全く荒唐無稽なものでもやな、「角のある鬼が出てきて金棒でどつくのや、あの絵の通りや」と言い切りよる。「お前、そりやまちがいないで、それは出てくるのや」と言う。想念の世界が分からへんのや。現実だと思ふんやな。霊界にはそういうようなものがあるんやと言いつつてしまう。

「ほな、俺やつたら地獄に行きたい。鬼に生まれて、入つてくるやつを金棒でどついたら、おもしろいで」と冷やかしてんな(笑)。そうしたら「なかなかあの鬼にはなれへん」と言うから、「何で

やねん」と聞くと、「あの鬼は仏さんの生まれ変わりやで」と言わはつたわ。その話は分かんねん。(幸子ちゃんの話) それからまた、面白い話があんなねん、「一大事の因縁」には書いてないけどな。(姉の)幸子が十歳で死んでるやろ。それが死んで、ちょうど七日目ぐらいか、郡山へうちの母親が買い物に行く時、家を出て石垣の所まで来たら、袂を後ろから引つ張るんやて。「ひよつと見たら、幸子やねん」と言うのや。「お母ちゃん、郡山へ行くの、一緒に連れてつて」と言うて、上下で話しながら一緒に歩いて歩くんやて。それで郡山のそばでふつと消えてしまう。幸子がどこかへ行つてしもたと思つたけど、用事をすませて大阪口の所まで帰ってきたら、また袂につかまってんねん。「幸子ちゃん、また来たんか」と言うて一緒に帰つてきて、うちの石垣の所まで来たら、ぼつと消えるんやて。

わしが「死んだら誰でも四十九日は行をしていて、十王さんのところへ行かなあかんと、いつも話してはるやろ。幸子は何でそんな早いこと、死んで七日ぐらいで追いかけてきて袂を持つて一緒に郡山へ買い物に行くねん。ちよつとこれは話が合わへん」と、いつもの通り冷やかしたんや。その時は「そう言うたら、そやな」と、頭をひねつてたけどな(笑)。想念の世界というのはなかなか分からへんねん。

岸野春子 実際に見えたりしたら、混乱するんやろね。

法主 生母さんは、おじいちゃん(法主様のお父さん)が死なはつてから十年目に死んでるのやけどな。

(おじいちゃんの話) おじいちゃんが死なはつた時の話も面白いねん。回向する日に「今日はな、おじいちゃん、仁王さんの方へ行つてはんねん」

とか言うんやな。ところが、毎日、生きてる時に食べてるのと同じおかずをこしらえて、お膳を供えてはるねん。「いつでもこれ供えてるの何でや」と聞いたら、「おじいちゃん、いつもここに居てはるさかいな、生きてはるのと同じにちゃんと供えてるねん」「そやかて四十九日間、あちこち行って行せんと具合悪いことないんか。うちに毎日べつたり居るのやつたら、向こうの極楽か地獄か知らんけど、どないなんねん」「いや、おじいちゃんはな、いつもここに居てはるねん」と、またその話になって終わり。

ちようど死んでから三日目か四日目か初七日のうちや、「おじいちゃんな、ちよつとごめんと言わはつたと思つたら、私の寝てることにな、ちゃんと横へ一緒に入つて来はんねん。そんなことかっこ悪いさかい、人に言えへんけどな」と、わしに言うんやで。そんなんやから、毎日お膳こしらえるんやわ、実感としてそばに居てはんねん。十萬億土とか知らんけど地獄極楽へ行つていたら、これまた話がおかしいところや。

何か言わはる度にいつも、わしが冷やかしてやるから、終いにはだいぶん頭ひねつてたわな。やつぱりお経の霊界よりも、自分の見えた現実の方を身近に考えるようになるんやな。それで人に、「こないしたら地獄行くで」とか、「このお題目を唱えたら、極楽行くで」ということを、ほとんど言わなくなつたやろ。

(お題目の話) お題目の話が、また面白いんや(笑)。「法華のお題目を唱えないと、絶対、極楽へ行けんと言っけどな、うちの先祖さんはおキシさん(法主様のお祖母さん)のもうちよつと前の代まで、これ皆、門徒で死んではんんやで。それやつたら、みんな地獄でどんどん走りしてらんか」と、わしが言うねん。「そんなことあらへんがな」

と言うから、「そしたら、あんたの説教しているのと話合へんな」て、いつも言うてやつてん。そやから、わしと一緒にするのはいやや、横から水さすからやりにくいと言うてたわ(笑)。  
そんなもんやねん。霊界というのは難しいんやな。

そやけど、生母さんの神通力というのは偉大なもんやつたと思うな、見えるという点では。そりやあ、正直やからな、あの人は。それはわしも感心した。嘘を言わん人やつた。見えたら、見えた通り。普通やつたら、前に自分があ言うたのに、今こんなこと言うのは都合悪いとか、話にかけひきがあるもんやで。

あの人は正直に言うもの。「そやけどな、せやな、おかしいな」と言うてみたりな、「そない言うたかて、こう見えるんやもの、しょうがないで」と言うてみたりな。「千手観音さんみたいに背中からエビガ二ほど手が出たら、そんなもの化け物やないか」「そやかてそんな観音様が出てきはんねんがな」。七面観世音なら顔が七つあると言うねん。それで七面観世音がこう言うたとか、どう言うたとか、対話できるんやもの。面白いよ、その話はな。

ああいうような人は今の社会では、そう居らんやろと思うけど、それでもわしが横におつて、一度水を差すから、かなり自分も考える余裕もあつたし、ブレーキになつたと思うな。それでなかつたら、行ききつてしまいうやろ。終いには解釈の仕方が、気が狂つたみたいなの、おかしなものになつたかもしれん。

それはまあ、面白い人やつたな。誰かてどうせ一回は死ぬんやから、死ぬこと自体は惜しいと思わんけど、そういうような型の人が世間にまたあつてもええなと思うわ。

(続く)

こだまことだま

長野県小鼻郡

小林 俊 三

02・10・27

大倭病院職員との座談会における法主様のお話「肉体のない心の世界」上・中・下を何回も拝読しました。7月に妻・都留子(※編集部の岸野春子の友人で、インドのアジア救らいセンターで仕事をしていた頃、大倭の新聞に寄稿してくれた。小林さんもインドでの仕事が長い)が亡くなってから、一層死後の世界と言うものに関心を寄せていますが、私自身のターミナルケアのためにも非常に大切な事柄だと思っています。

法主様が体験をありのままに何気なくお話しされて、私が今まで理解し得なかつた宗教真理のエッセンスのようなものが、雑談のようなお話の中ちりばめてある事に驚き感動しました。ターミナル・ケアはこれのお話を認識し、実践することが出来れば、それがすべてであるように感じました。

この現象世界に霊媒や霊視に現われる人格霊とか地縛霊その他様々の人間の霊は法主様が仰つてゐる通り、「人間の潜在意識」であるということがはつきり解つた気がします。動物霊も動物が本来持つて生まれた潜在意識(本能意識)とその動物が生存していた時に「学習」したことがその潜在意識に蓄積されている霊とも云えるのではないかと思います。

この世で浄化されなかつた罪穢れは潜在意識に残り、或いはこの世で獲得した精錬された高潔な意識もやはり死後も残るのですね。魂と共に……。残された自分の人生を頑張らなくてはと痛感しています。

今まで知りませんでした、法主様は持つて生まれた潜在意識を更に精錬し、浄化された高い高い意識になられたお方であつたのですね。

# 源平の争い、家の公運

兼田 隆

こもれる魂魄の地をたずねて(十二)

きんだち

一、一ノ谷のいくさ破れ 討たれし平家の 公運  
あわれ あかつき寒き 須磨の嵐に 聞こえし  
はこれか 青葉の笛

二、 更くる夜半に 門を叩き わが師に託せし  
言の葉哀れ 今わの際まで 持ちし籠に 残れ  
るは 「花や今宵」の歌



この歌は尋常小学校の唱歌です。「一ノ谷のいくさ破れ：♪」と歌ってあげると、お年寄りも一緒に歌ってくれるという「青葉の笛」。今回は、一ノ谷の戦いを中心に平家の公達の魂魄の地を、一部ではありますがご紹介しようと思います。

一ノ谷の戦いとは1184年、今の神戸市須磨区から明石市にかけて広範囲で行われた源平両軍の合戦です。この戦いの中、平家の公達は数々のエピソードを残して多くは討ち死にします。

「青葉の笛」の一番に出てくる平敦盛(あつもり・清盛の甥)も、この一ノ谷の地に17歳という若い命を散らします。『敦盛塚』という3mもある石塔が須磨浦公園の西のはずれにあり(写真①)、今も線香の絶えることがないといえます。

近隣にある須磨寺には、『首洗いの池』や『敦盛卿首塚』がこの合戦の名残をとどめています。また『敦盛供養塔』が高野山と京都黒谷の金戒光明寺にもあります。

平清盛の弟で剛勇で知られた薩摩守平忠度(ただのり)も、一ノ谷にて討ち取られた公運の一人です。「青葉の笛」の二番は藤原俊成に師事した秀れた歌人でもある忠度を歌ったものです。この忠度には、平家一門が都落ちの際に京都に引き返し、詠草一卷を師である俊成に託したという挿話があります。また討ち取られた死者のふところから、「行き暮れて木の下陰を宿とせば花や今宵のあるじならまし 忠度」という「旅宿の花」と題する和歌が一首出てきて、この歌によって忠度のだと判明したという話もあります。『平忠度の腕塚』が長田区駒ヶ林に『忠度胴塚』が野田町に、どういふ訳か明石市天文町にも『腕塚、胴塚』が存在します。



余談ですが、薩摩守平忠度(ただのり)を無賃乗車の「ただ乗り」に掛けて、

「ただ乗り」の事を「薩摩守」と言う洒落があります。後世このような洒落に使用されようとは忠度も思いもよらなかったことでしょう。(享年41歳) 平重衡(しげひら)は清盛の4男で、平家一門

の中でも武勇の人として知られています。1179年の南都攻撃にて東大寺、興福寺を焼き打ちしたり、次々と戦を経験し、運命の一ノ谷を迎えます。この合戦では源氏方の武將に馬を射られて捕らわれの身になってしまいます。須磨寺駅前には『平重衡とら



われの遺跡』として説明板と石碑が残っています(写真②)。重衡は後に頼朝の待つ鎌倉に下り、最後は恨みをいだく南都の衆徒に引き渡されて木津の地にて29歳で刑死します。

この地にある安福寺という小さなお寺に『重衡の墓』があり、また妻が重衡の遺骸を引き取って、里の日野に葬ったといわれる『重衡卿墓』が存在します。この安福寺の近隣には『重衡首洗いの池』



や村人が重衡を哀れに思い、その横に柿の木を植えたが一向に実がならなかったという『不成柿』があります。(現在は実るらしいですが) 平維盛(これもり・清盛の孫)は富士川の戦い、倶利伽羅峠の戦いと総大将として出陣しましたが、大敗してしま

# 時の波蕩(その一)

大倭神宮には、その最初から大きな命題が一つ眠っている。それは「戦に勝利した者が、神の摂理に従い、『地の楽園』のような土地を、敵対した者達に譲り渡し、その上で彼らと共に生きる事ができるのか?」という、かつて何処の国の歴史にもなかったような、大きな大きな命題である。

それは人の世の現実の中で、人々が担うにはあまりにも重い課題であった。しかし、実際にそれを受け入れた古代大倭の人々の身の上には、さらにその重い課題が引き起こす、二重、三

## 長曾根一族への念い

林 修 三

「登美谷の名残」では、私達が今踏んでいるこの土地の上に、遙かな古代以来の歴史の流れのあったことを感じさせられました。次は、その歴史を巡る真実を考えるシリーズになります。

「波蕩」とは、波のように揺れ動いてしずまないこと、の意。(編集部)

ます。その後一ノ谷の戦い、屋島の戦いに参戦後、那智の沖に身を投じたとも、奈良県野迫川村の平という地に隠れ住んだとも言われています。この村に『維盛歴史の里』という公園があり、敷地内の小高い丘の上に『平維盛の墓』といわれる塚があります。また近くには維盛を守ったであろう家来墓もあり、都人ならば活躍の場もあったであろうと思われ、哀れさを感じられます。

最後の合戦である壇ノ浦の戦いで、平家一門はことごとく入水または戦死しましたが、一門のうち建礼門院徳子(けんれいもんいんとくこ・清盛

の次女)、平宗盛(むねもり・清盛の次男)親子、平時忠(ときただ・清盛の妻の兄)らは捕らわれています。建礼門院は一族の冥福を祈る為に尼となり、その余生を京都大原寂光院にて終えています。近くにその『建礼門院御陵』が存在します。

平家最後の総大将である平宗盛、清宗親子は滋賀県野洲町篠原の地にて斬首されています。

現在は国道8号線が通り、車の往来が激しい道沿いに見逃してしまいそうな「平家終焉の地」という小さな案内板があります。案内板にしたがつて林道を進むと、平家一門の運命を見極めたかのよ

重の難題がのしかかっていった。

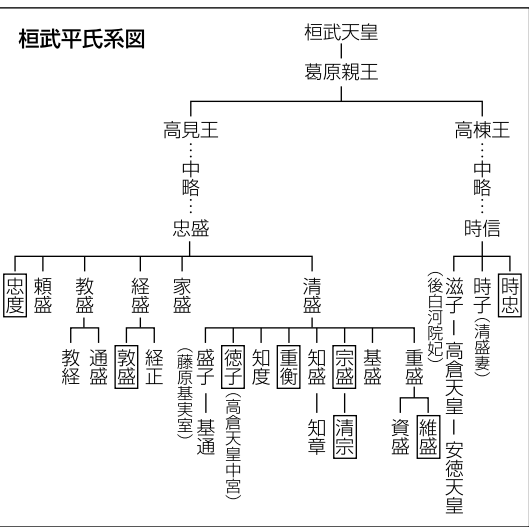
それは、一つには敵対した者達との日々の、現実的で新たな共生の過程であり、一つには如何に主君の命であり神のきめごととはいえ、受け入れがたい新たな主君への忠誠であった。結果、ある者の多くは住み慣れた原郷、大倭の地を去り未知の他の世界へと散っていった。無論、幾多の困難が、各々の土地に向かった彼らを待ち構えていた。

そして又、大倭の地に残った多くの者達の心の中にも、幾多の別れの悲哀と、過去への郷愁が渦巻いた。しかも、その後のこの国の歴史は、世界史上に類を見ない、かくも崇高な長曾根一族の覚悟を、潔さを、裏切り続けていく。

果たしてこのように過酷な神の試練の意味するところは……。

その回答は、未だ(神ならぬ)人である、悩み多き私達の心の中の解決をみず、念いは哀しみと怒りに彩られて、今もこの世とあの世をなやまし続けている。

小春日に 愁う情けの 深きより、  
悟れからまし やわらぎの 黙示



うに『平宗盛御終焉之地』という墓碑が現れてきます(写真③)。その前にたたずむと、なにかもの悲しくも想われます。

最後に「平関白」とまで呼ばれ「平家にあらずんば人にあらず」とまで豪語した平時忠は、能登に配流の身となります。珠洲市大谷という奥深い山谷に『平大納言時忠とその一族』の墓石があります。輪島市野町に時国家という時忠の子孫と伝承している集落があり、800年もの月日を平家の血脈を受け継ぎ現在に至っています(写真④)。

今回取り上げさせていただいた以外にも、平家一門の魂魄の地はたくさんあります。その一つ一つを訪れると、やはりあの言葉が想い出されます。「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顕す。おごれる人も人しからず、ただ春の夜の夢の如し。たけき貴も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ……」(平家物語)

# 「隆家」の頃の法主 (1)

## 中学校受験

矢追隆義



今回、『おおやまと』編集部から、法主様（小生の実兄）が大倭の聖地、菅谷の地に移られるまで同居していた小生に対し、兄を取り巻く家族生

活の中で、兄にかかわるいろいろな思い出に残る出来ごと等を書き続けてくれないかとの話。考えてみると小生も今年は八十二歳、その当時への正確な追想には自信がなく、年代や登場人物についても疑問が残るが、お許しを戴けるのであれば、との甘い考えのもとお受けすることにしました。

仕事始めとして先ず写真帳を開いてみた。目に止まったのは、小生が兄・姉・弟と四人揃ったの珍しい写真であった。左端の着物姿が兄で、当時立正大学予科三年、右側の着物姿が姉・彪子で、奈良女子高等師範学校附属女学校三年（四年生の夏死亡）、右端が小生で小学校三年、真中が弟・隆盛で二年生位だったと思う。珍しい兄の着物姿、若かりし日の写真である。

さて、今回は父から聞いた兄の中学校（今の高校）受験の話です。当時、富雄小学校より三人の同級生が郡山中学校（今の郡高）を受験したが、合格したのは兄でなく、他の一人だったそうで、成績の良かった兄の不合格に疑問を持った担任の先生が、中学の方へ聞かれたところ、成績は見事な合格点だったが、体格検査で不合格になったとのこと。

言われてみれば兄の胸には確かに茶碗を裏返したようなくぼみがあり、背泳すれば、くぼみの胸に水がたまり、メダカ数匹くらいは泳げそうな状態であったような記憶がある。

不合格になった兄の入学する学校がなく担任の先生は八方に手を尽くし、つてを伝いやつと布施にあつた日新商業の鹿島校長に頼み、すべり込み入学ができたそうです。（後日、恩返しと、この学校で教鞭を取ったこともあつた）

兄は身体上の奇形により、志望校への入学もできず落胆していたが、母は悲しまず、今回の現象は後日解ることで、兄が一大因縁（使命）を持つ

て生まれて来たことを示す神よりの「あかし」であると申したそうです。

大学卒業後の兄は、戦場へ出る心配もなく、神より与えられた使命か？単身上京、八紘会の設立、敗戦、再び大和の地に戻り、宗教法人大倭教の開設認可を受け「あなたも わたしも しあわせに」の旗印のもと、理想郷を実現すべく、荒廃した大和の地に足を踏み入れ法主自ら街頭に立ち、所信に向かい説法を続けた。他方、現実的な活動の場を菅谷の地に求め、やがて一つの財布を共有する共同体「あじさい邑」が生まれ、大倭教発祥の聖地になって行くのである。

あの時の兄に対する母の言葉の重さを、今つくづく感ずるのである。

## 平成15年度 大倭会行事のお知らせ

### 文化行事

場所・時間・交通等の詳細については各前月までの『おおやまと』でお知らせします。みなさんお誘い合わせの上多数ご参加下さい。

- 4月20日(日) 伏見桓武・明治天皇陵(京都)
- 5月18日(日) 椿大神社と御在所岳(バス旅行)
- 6月22日(日) 大阪市東洋陶磁美術館(大阪北浜)第4日曜日
- 9月14日(日) 学習会「平家一門の盛衰」(禊会で)
- 10月26日(日)～27日(月) 秋の旅 赤間神社・壇ノ浦

お問合せ 世話人 湯浅芳郎 電話 0742-48-3389

### 文化講演会

11月9日(日)

詳細未定

# あじさい日誌

1月12日 禊会。年頭に当たり参加者一人一人の想いを出し合いました。そこへ横浜から秋篠寺の伎芸天を見に来て、久しぶりに邑にも寄ったという横井英夫さん、菅沼照美さんも飛び入りで参加。沖縄八重山諸島に伝わるミロク神に捧げる歌や踊りから創作してコンサートが続いているというお二人にそれを披露してもらいました。昇ちゃんにも会いたいと言ってくれたので入院中の大倭病院で面会、大倭会館に一泊されました。

午後6時から奈良パークホテルで邑交会の新年会。  
1月13日 大とんど。正月の飾りものや大倭神宮の枯れ竹などが威勢の良い音を上げていました。有志の方々によるぜんざいや大根炊きもすっかり恒例になりました。須加宮寮・菅原園で長く暮らした藤家道子さん（今はボランティアに支えられ西大寺で自立生活を送る）もちょうど通りかかって参加。

1月15日 大倭神宮月次祭。  
1月18日 交流の家で夜、FIWCの定例委員会。1カ月後に迫った3回目の中国ワークキャンプに向けての話し合い等。今年には広東語の勉強もして行くそうです。

1月20日 午前10時30分より拝殿において大倭殖産株と関係業者の安全衛生協力会の安全祈願祭が執り行われました。仕事柄、危険なことも多いので皆さん真剣な態度でした。

1月23日 大倭大本宮月次祭。  
1月26日 八王子市の御蔵島神明さんが母・石井利枝さんと共に来邑。28日まで。  
1月29日 前夜からの強風で、邑の立ち枯れた松等が何本も倒れました。法主様の奥津城の近くに倒れた木もあり驚かされましたが、幸い被害と言うほどのものはありませんでした。邑人や熊田義見さんの手でポツポツ片付けてられています。

1月30日 菊地洋一・相馬敬子さんが出口三平さん、桑木崇充さんと来邑。2泊されました。  
2月2日 吉澤満・都史季夫妻の長男、弘行さんが4年ごしの交際を実らせ木戸麻未さんと春日野荘で結婚式を挙げました。  
2月3日 玉緒祭。祭典後、平成5年の玉緒祭の法話を聞かせてもらいました（同年『おやまと』3月号で掲載）。お供えの豆を皆も頂いて帰りました。柘に豆は「ますますママに」のことだまだそうです。

2月6日 大倭神宮月次祭。パレンタイムンデー間近を感じさせるチョコプレートのお供えを頂きながら、法主様のされたママシの皮を使う治療の話などが出ました。邑で金属プレスの仕事を

していた頃、指を落とした人がそれで再生している、と。  
夜、大倭会館で邑倭の会。  
2月9日 法主様の帰幽を記念する8回目（平成8年最初の帰幽祭を数えます。満では7年）の帰幽祭。岡山県美甘村からの雪のお供えというのもありました。この日のテープは平成4年元旦、大倭神宮の社務所で法主様を囲んで霊界について色々お聞きしているもの（同年3・4月号『おやまと』に掲載）。祭典後、車椅子の森下糸さんの周りには挨拶する人の輪ができて、「誰が誰か分からへん」と言いつつ嬉しそうでした。

1月22日 合同防災訓練。今回は消防署員による防火ビデオと講話で勉強しました。  
2月4日 節分の行事。職員が鬼に扮して恒例の大ママまき大

会をしました。

（須加宮寮）  
1月23日 県内の障害者施設の栄養士さんによる栄養教室が行われました。

（長曾根寮）  
1月13日 新年の集いと誕生会。デイサービス利用の方も一緒に総勢120名ほどが集まり会食や演芸、福引をにぎやかに楽しみました。  
1月22日 「コーラス喫茶MOMO」。今年のチャレンジ曲をワイワイ！ガヤガヤ！の結果、①琵琶湖就航の歌 ②歌の町 ③赤い花白い花に決めました。  
1月29日 俳句の会。「豪雪や越後の駅の小座布団」初茶の湯銘菓に集いのみけり

大倭安宿宛では  
1月22日 合同防災訓練。今回は消防署員による防火ビデオと講話で勉強しました。  
2月4日 節分の行事。職員が鬼に扮して恒例の大ママまき大

（菅原園）  
1月22日 先月号の福田卓さんの文章中、渡月橋傍らの「蓼き茶屋」は「琴き茶屋」のま

（菅原園）  
1月22日 先月号の福田卓さんの文章中、渡月橋傍らの「蓼き茶屋」は「琴き茶屋」のま

（菅原園）  
1月22日 先月号の福田卓さんの文章中、渡月橋傍らの「蓼き茶屋」は「琴き茶屋」のま

（菅原園）  
1月22日 先月号の福田卓さんの文章中、渡月橋傍らの「蓼き茶屋」は「琴き茶屋」のま

（菅原園）  
1月22日 先月号の福田卓さんの文章中、渡月橋傍らの「蓼き茶屋」は「琴き茶屋」のま

（菅原園）  
1月22日 先月号の福田卓さんの文章中、渡月橋傍らの「蓼き茶屋」は「琴き茶屋」のま

# あんない

\*月次祭（大倭神宮）  
3月6日（木） 午後2時より大倭神宮にて。  
\*大倭会主催第四一二回禊会  
3月9日（日） 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。  
\*月次祭（大倭神宮）  
3月15日（土） 午後2時より大倭神宮にて。  
\*月次祭（大本宮）  
3月23日（日） 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

▼今年の冬は寒い寒いと言っていますが、昔はもっと寒さ厳しかった様に思います。大倭に来た当初は、しもやけでさつまいもの蔓を煮た汁につけると良いと言われ、手をつけた事が思い出されます。三寒四温でだんだん春を感じる日も多くなり、梅の花もほころぶと心もなごむ今日この頃です。（房）

▼人との会話が少しずれると筋が違って、いやな思いが心に深く残り、険悪なムードになります。口から言葉が発する前に考えて言わないと、と感じる今日この頃です。法主さまが言われていた「みんな仲良うしいや」って、心優しい言葉でむつかしい。穏やかな気持ちで心から接する日がきますように。（千）

# 編集後記

▼今年の冬は寒い寒いと言っていますが、昔はもっと寒さ厳しかった様に思います。大倭に来た当初は、しもやけでさつまいもの蔓を煮た汁につけると良いと言われ、手をつけた事が思い出されます。三寒四温でだんだん春を感じる日も多くなり、梅の花もほころぶと心もなごむ今日この頃です。（房）

